

日本國天皇家論

2章 法隆寺

法隆寺は日本國天皇家の菩提寺

法興寺・発掘調査の記録

「法興寺」が移築され、「法隆寺」となった。「法興寺」は「法興」の世に日本國天皇、「上宮法皇」が建立した寺である。法隆寺釈迦三尊像は、「上宮法皇」が亡くなった後、鞍作首止利によって作られ、「法興寺」に安置されていた。「法興寺」が斑鳩に移築された時、この釈迦三尊像も共に移された。いわば、新しい「法隆寺」の本尊として金堂に安置されたのである。だが、「法興寺」の本尊は「釈迦三尊」ではない。「法興寺」の本尊佛は何だったのか。それは、「安居院」の金銅釈迦佛である。その事情は分からないが、この本尊は斑鳩に移されずに明日香に残された。現在、傷だらけのお顔ではあるが、かつて「法興寺」の中金堂に輝いていた本尊はこの釈迦佛である。

現在、私たちは「法隆寺」を見る時、それは日本國天皇・「上宮法皇」が飛鳥に建立した高句麗様式の寺、「法興寺」を見ているのである。だが、本当に「法興寺」の寺跡は現在の「法隆寺」と一致するのか。

奈良・明日香を訪れてみよう。明日香に「安居（あんご）院」がある。現在の「安居院」には近隣の市町村から多くの見学者が訪れている。また五月、蓮花の花が咲くころには、小中学校の遠足で多くの児童、生徒が訪れる。古代の飛鳥の風情をそのまま残した「安居院」周辺は訪れる人々の心を癒している。



安居院

法興寺の伽藍

発掘を實際担当した坪井清足氏は、「飛鳥寺発掘調査報告」を元に「飛鳥寺」(中央公論美術出版)で詳しく書いている。

こうして、わが国でもっとも古い伽藍配置は四天王寺式であると考えられ、昭和十五年ごろから終戦当時まで掘りつづけられた朝鮮の百済の都扶余で、多くの寺院が発掘された結果も、これを裏付けているとされていた。

こんなわけで、実は飛鳥寺の伽藍配置も当然四天王寺式であろうとの予想のもとに調査をはじめ、金堂と塔とが簡単にみつかったのも、つぎは当然回廊と考えていたのであった。その想定がくずれたので全く当惑してしまった。

飛鳥寺は予想を覆して高句麗様式の寺だった。

- (1) 「中金堂」は正面21.2m、奥行き17.5m……法隆寺の金堂20.5m奥行き17.2m
- (2) 塔は一辺7m……法隆寺の塔は一辺7.5m
- (3) 中門は正面16.7m奥行き13.3mで、幅のわりに奥行きが深く、正面・奥行きともに三間の門である。この門は法隆寺の中門のように、重層の門であったと考えられた。
- (4) 回廊は東西104m、南北80m。講堂は回廊の外側にあった。
- (5) 現在の塔の基壇上面から2.7mの深さに花崗岩の塔の心礎があった。一辺2.4mの岩で、中央の1.6m角を平らに浅く削り、その中央に30cm角の孔をほりこんでいる。この孔の東の壁にさらに、龕(がん・仏像を納める厨子)が掘られている。



安居院に展示されている
法興寺伽藍

発掘調査の記録には「法興寺」の「中金堂」「塔」「回廊」「中門」は、現在の「法隆寺」の「金堂」「塔」「回廊」「中門」の大きさと変わらないことが記録されている。

- (1) 飛鳥寺の塔は、現在の法隆寺五重塔とほぼ同じ大きさであった。
- (2) 飛鳥寺の中金堂は、法隆寺の金堂とほぼ同じ大きさであった。
- (3) 飛鳥寺中門の側面が三間であったことは法隆寺中門と同様であった。
- (4) 飛鳥寺回廊の単位柱間は、法隆寺回廊と同様である。
- (5) 飛鳥寺南北径は、法隆寺回廊の東西径と同じく二十四間である。

「日本書紀古典文学大系日本書紀下」の補注21－8は次のようにまとめている。

1. 飛鳥寺五重塔は法隆寺五重塔と同じ大きさ

近年の発掘調査で伽藍の主要部が判明し、塔を中心とし、その北と東と西に金堂を配し、塔の前方に中門から左右におこる回廊が塔と三金堂を囲み、回廊北方に講堂、中門前方に南大門、回廊西方に西大門があり、境内の境界をなす築地がこれらの大門に接続していたことが確かめられた。塔はその基壇の比較から、法隆寺の塔と同じくらいの大きさであったと考えられる。

1. 飛鳥寺北金堂は法隆寺金堂と同じ大きさ

当初の北金堂は法隆寺の金堂とほぼ同じ大きさであった。東西の両金堂は向かい合った位置にあり、二重基壇をもつが、外まわりの基壇には小礎石がならんでいて、軒の支柱かなにかを受けていたことがわかった。類似の構造は平壤付近の清岩里の高句麗時代の寺跡や百済の都であった赴余の大唐平百済塔のある寺跡にも例があつて、半島伝来の手法である。

1. 飛鳥寺中門は法隆寺中門と同じ大きさ

中門の側面が三間であったことは法隆寺中門と同様であり、回廊の単位柱間は法隆寺回廊と同様で、その南北径は法隆寺回廊の東西径と同じく二十四間である。

塔と三金堂からなる伽藍配置の例は百済ではまだ見出されていないが、高句麗では前記の清岩里廃寺跡に類例があり、最古の軒丸瓦の文様も赴余出土のものと酷似し、前述の東西金堂の特殊な構造とともに、百済から渡来した造寺工・露盤師・瓦師等が飛鳥寺の造営に当たったという書紀や元興寺伽藍縁起の記事は有力に裏付けられていると思われる。



法隆寺五重塔

法隆寺金堂



法隆寺中門





法隆寺伽藍と法興寺伽藍は同じ

発掘された「法興寺」の「五重塔」「金堂」「中門」「回廊」は現在の「法隆寺」の「五重塔」「金堂」「中門」「回廊」と同じ寸法である。「法興寺」は上宮法皇が明日香に建立した国家理念を象徴する国立の寺院であった。この「法興寺」が移築されて「法隆寺」となった。

古代、日本國天皇家の都、藤原京の南に、天皇・「上宮法皇」が国家の総力を挙げて建造した寺「法興寺」が、現在の「法隆寺」である。「法隆寺」の「金堂」「五重塔」「回廊」「中門」はかつて飛鳥の地に輝いていた「法興寺」の「中金堂」「五重塔」「回廊」「中門」である。

「上宮法皇」は仏教導入を巡る王朝内の闘争において蘇我氏と共に物部氏と戦い、勝利して、天皇位に即位した。年号を「法興」と定め、飛鳥に「法興寺」を建てた。幸運にも、私たちはその寺を今、「法隆寺」に見ることができる。「法隆寺」は世界最古の木造建築である。しかし、その事だけに価値があるのではない。本当の価値はこの寺が日本國の最初の仏教寺院「法興寺」であったということにある。

川端俊一郎氏は著書「法隆寺のものさし」で、「法隆寺は移築された」と論証している。川端氏は「法隆寺」は、古代九州筑紫で造営された寺が移築されたと考えている。しかし、川端氏の移築論は「法隆寺」が、元はどこにあったのか、当否は別にしても特定していない。

「法隆寺」は移築された寺である。しかし、その移築された寺は九州に存在したのではない。九州から移築されたのではない。「法隆寺(若草伽藍)」を建立した「上宮法皇」が仏教立国の象徴として明日香に建立した高句麗様式の大寺院「法興寺」が移築されたのである。現在の「法隆寺」は九州王朝とは無関係である。また「法隆寺釈迦三尊」の「上宮法皇」も、また、九州王朝とは無関係である。「上宮法皇」は関西に実在した日本國天皇家の天皇である。死後、太子町叡福寺太子廟に母、妻と共に静かに眠っている。

観世音寺移築の可能性はない

九州太宰府の「観世音寺」を移築したといったのは米田良三氏である。 (「法隆寺は移築された 太宰府から斑鳩へ」 米田良三著)

現在の「法隆寺」は、新築ではなく、移築されたものだという研究結果によって、「法隆寺」研究は新たなスタート地点に立った。「法隆寺」はどこにあった寺が移築されたのか。この解明なくして、「法隆寺」研究は前に進むことはできない。では、「観世音寺」が移築されたのか。「観世音寺」の伽藍配置は東西93m、南北78mの回廊に囲まれて、東に五重塔、西に金堂が立つ。回廊の南面中央に中門、北面中央に講堂があった。金堂は東を正面として、五重塔と向かい合っていた。

現在の「法隆寺」は、東に「金堂」、西に「五重塔」という伽藍配置である。「観世音寺」と東西が異なる点を除いてよく似ている。しかし、観世音寺の縁起は伝わっておらず、「続日本紀」によると、天智天皇が斉明天皇の追善供養のために発願したものといわれる。斉明天皇は661年没である。もし、それ以降の建造とすると、法隆寺・五重塔の中心柱の伐採年594年と合わない。「法隆寺」の方が「観世音寺」よりずっと早く建立されている。「観世音寺」が移築されて「法隆寺」となった可能性はない。



現「法隆寺」は飛鳥の地の建立されていた「法興寺」である。「法興寺」は日本國天皇の「上宮法皇」によって、法興元年に計画され建てられた仏教立國日本國の象徴であった。